

幕末期外交史のなかの富士山

〈静岡県富士山世界遺産センター教授／徳川記念財団特別研究員 松島 仁〉

徳川将軍から米国大統領へ遣わされた外交的贈答品としての富士山絵画については、以前の
コラムで紹介した。万延元年(1860)日米修好通商条約批准書交換の使命を託された遣米使
節が持参した狩野董川中信筆「富士飛鶴図」(当センター蔵)である。

しかしながら遣米使節がサンフランシスコに到着する目前、3月3日(和暦)には開国を推進し
た大老井伊直弼が桜田門外の変に斃れ、のち幕府の外交政策は転換を余儀なくされる。文久2
年(1862)には、すでに約されていた開港と開市の一時停止を求めるためフランス、英国、オラン
ダ、プロイセン、ロシア、ポルトガル6ヶ国へ第一次遣欧使節が送られる。同使節団の派遣に際し
ても外交的贈答品は調べられ、各国へは掛幅画が10幅ずつ遣わされた。

掛幅群のなかには富士山図も含まれる。「…富士山之儀八万国一般ニ仰望仕居候名山
之儀ニ付、是又亜国之振合を以各国へも一幅ツ御遣し相成候方可然奉存候…」(『続通
信全覧』)——米国へ贈られた富士山図の前例に倣い、各10幅のうち富士山図を必ず一幅ずつ
含めよ、という幕府側の指示を踏まえたうえでのことである。富士山は世界が仰ぐ名山であるた
めというのが理由だ。

徳川将軍が統治する日本を“中華”と仮想しつつ、朝鮮王朝やオランダ、琉球国を“朝貢国”に
見立てる、いわゆる「日本型華夷意識」のなか、富士山が中華を凌駕するナショナルシンボルとし
て位置づけられていることは、すでに拙著(『権力の肖像』、ブリュッケ、2016)のほか、2月刊行の
『富士山と日本人』(静岡新聞社)でも述べたが、ここにおいて富士山は中華に加え欧米をも包含
した「万国」が景仰する「名山」へと昇格されているのである。

欧州各国に贈られた10幅には、ほかに“中華皇帝”徽宗の「桃鳩図」に倣った図や、“皇帝の
絵画”として認識されていた南宋の宮廷画家夏珪の山水図にもとづく図も含まれていることは、
高岸輝氏が指摘するとおりである。掛幅群にはさらに、足利将軍周辺で享受された元代の画家
孫君沢の作品に範をおいた図や、王者の富貴と豪華を示す伝徐熙「玉堂富貴」(台北故宮博物
院蔵)に近い図も撰ばれ、東アジアの伝統的な為政者としての徳川将軍のイメージが顕在化され
る。遣欧使節持参掛幅群10幅にみる画題構成は、狩野探幽筆「倣古名画卷」(個人蔵)のような
一連の倣古図、すなわち“中華皇帝”徽宗の画にはじまる中国名画のコピーを連ねた掉尾に狩
野派様式の富士山を配し、中華皇帝に淵源する東アジアの文化伝統が集大成され帰結する場と
した作品群とも通う。

遣欧使節持参掛幅群には、吉野図や龍田図など王朝和歌にもとづいた伝統的なやまと絵も含
まれる。各画題ごとに和漢が明別され、全体で春夏秋冬が揃った四季を構成するなど、時間と空
間が完結した宇宙観が示され、東アジアに普遍的な徳川将軍の権力と権威が対外的に表象され
るのである。このなかで江戸城障壁画にも描かれ将軍の身体と一体化する権力装置となった富
士山図には、徳川将軍そして将軍の統治する日本を寓意する“肖像”的役割が期待された。

背景には、同じ時期に英仏両軍が大清帝国を侵略したアロー戦争が影響しているのだろう。
同戦争は中華皇帝の御苑であった北京の円明園が略奪され放火されるなど、東アジア文化史の
危機でもあった。

幕末の動乱のなか海を越えた富士山に託されたのは、東アジア文化の矜持という悲壮な使命
だったに違いない。